

膠着状況にある 利用者と家族に どうアプローチするか



事例提出者

Fさん（在宅介護支援センター・ソーシャルワーカー）

事例の概要

Nさん 79歳 男性

病歴

変形性腰椎症、慢性気管支炎、胃1/2切除

ADL

変形性腰椎症のため腰が曲がっている。下肢筋力の低下もあり、そろそろと歩く。外出時には電動バイクを使用している。

生活歴

- ・県内で生まれる。
- ・31歳で結婚。独身時から鉄工所に勤めており、結婚してからは自宅横に工場を建て、鉄工所を経営する。
- ・67歳の時、不景気を理由に鉄工所を閉め、以後農業に専念する。
- ・平成10年7月に妻をがんで亡くし、独居となる。隣の市に住む息子夫婦がときどき訪ねて来る。

- ・本人にはアルコール依存があり、ビールを食事代わりに飲んでいるため、食事管理ができていない。
- ・脱水と肺炎のため、平成10年8月に10日間入院となる。
- ・その入院中、本人より支援センターに、「家に帰ってからの家事ができない。特に食事が困る」と相談があり、長男とも相談し、退院後ホームヘルプサービスと配食サービスを利用することになる。
- ・その後も、持病の腰痛、気管支炎、脱水等で入退院を繰り返す。
- ・長男は、ひとり暮らし生活を心配し、平成13年5月、本人が住んでいた家を建て替え、同居する。

紹介経路

前担当者より引継いで、平成12年10月から担当することになった。本人の了解を得るため、同行訪問する。本人の情報については、そのつど前担当者から聞くつもりで、詳しくは把握していなかった。



スーパーヴァイザー・奥川幸子氏を招いて開かれた事例検討会の模様を紹介します(検討会及び事例の内容は、誌面の都合及びプライバシー保護の観点から、全体の趣旨に差し支えない範囲で変更させていただきました)。

初回訪問

平成12年10月4日

本人はベッドに横になり、テレビを見ていた。3畳ほどの部屋にパイプベッド、足元にはテレビ、床頭台に電話、薬、タバコ、ティッシュ等が置いてある。

変形性腰椎症のため腰が少し曲がっており、腰痛を訴えていた。実年齢よりもかなり高齢という印象を受けた。

ふだんの生活は、誰の束縛もなく自分の思うように過ごしているとのこと。ケアマネジャーが代わることを話すが、さほど関心を示さず、「何のことか」という様子だった。

その後の援助経過

平成13年1月10日

本人が自分で入院の用意をし、タクシーで当支援センターの併設病院へ来院。腰が痛くて我慢できなかったとのこと。そのまま入院となる。

病室へ様子をうかがいに行くと、「今住んでいる家を建て替えて長男夫婦と一緒に住むことになった。わしは『今のままでええ』と言った

が、息子たちが勝手に決めてしまった」と、かなり不満気に話す。

1月14日

病院より電話。「長男から、5月末に家が建つので、それまで入院させてほしいとの相談があった」とのこと。

5月21日

29日に退院予定とのことなので、「新しい家で、長男夫婦たちと暮らすことになるね、どう？」と聞くと「知らん」と不機嫌に答える。

だが、「日中は一人になるので、毎日でもヘルパーさんに来てもらいたい」とのことだった。サービス利用について理解していただく必要があると思い、訪問の約束をする。

5月29日

退院。新居を訪問する。家の中はまだ片付いておらず、長男夫婦も忙しそうだった。本人はソファーに座っており、機嫌よく迎えてくれた。

介護保険でのサービス利用について説明する。長男より「一人でおいておくのが心配。どんな形でもいいから、お宅の事業所から来てもらいたい」と言われる。

サービス内容：ヘルパーによる週3回の入浴介助（5月30日より開始）、訪問看護、服薬指導、食生活指導、リハビリ（週1回）。

6月12日

ヘルパーより、本人が拒否するため入浴が実施できない。巡回扱いで帰ろうとすると、「そんなにすぐに帰るんだったら、来なくてもいい」と言われるとの報告があった。

6月13日

訪問。新しい家での生活ぶりなど、本人からゆっくりと話を聞く。「今まで使い慣れていた生活用品が何もない。この家の物は自分では扱えない。嫁は『何もしなくていい』と言うが、一日中一人で留守番する者の身になってみてほしい。家を建て替えてから、近所の者も来なくなった。もうだめだ。つまらん」

引き続き、別室で長男の妻と面談。長男の妻曰く、「本人の性格もあり、昔からしっくりいかなかった。料理を作っても口に合わないとか、皿に盛る量が多いと言って、皿をひっくり返すこともある。こちらとしては一生懸命やっているつもりだが、どうすればいいのかわからない。主人（長男）は、同居を始めてから5kgも痩せてしまいました」

ケース検討会

奥川 Fさんが今日検討したいのは、どんな点ですか。

Fさん 今の状況をどう突破すればいいのか、

その糸口をつかめればと思います。

奥川 ご本人と長男夫婦の膠着状況をどう突破すればいいのか、ということですね。

では、まずはこのクライアントとFさんが置かれている状況をより明らかにするために、どんな情報が必要なのか、Fさんから引き出してみてください。

クライアントの人物像を探る

発言 長男夫婦はおいくつですか。

Fさん すみません。きちんと把握していません。ご本人は31歳で結婚されて、現在79歳ですので、長男さんは40代後半だと思います。

発言 お子さんは長男だけですか。

Fさん いえ、もう一人次男がいます。隣の市に住んでいて、ごくたまに顔を見せる程度のようなのです。

発言 ご本人と息子さんたちとの関係について教えてください。

Fさん ご本人は息子さんたちとうまくいっていると思っています。ですが、実際には決してそうではなくて、特に次男さんはご本人に対してよい感情をもっていません。

発言 何か具体的な出来事があったのですか。

Fさん はい。以前、次男の奥さんが脳梗塞で倒れたときに、ご本人が酔っぱらって病院に現れて「死に損ない」というようなひどい台詞を言ったらしいんです。それ以来、次男さんはご本人に対して、絶対許さないという気持ちもっています。

奥川 それはいつのことですか？

Fさん はっきり何年前かはわかりません。

発言 ご本人は、次男が自分に対して許さないという気持ちをもっているということを知らないのですか。

Fさん ご本人は酔った上での発言なので覚えていないのかもしれませんが、次男さんも日頃はそういう気持ちを露骨には出しませんので。

発言 農業では、何を作っているのですか。

Fさん 米です。

発言 最近でもご本人がやっているのですか。

Fさん 体力的な問題がありますので、実質的には長男さんがやっていて、ご本人は口を出すぐらいです。

発言 アルコール依存についてですが、いつから、どのくらい飲んでいるのですか。また、治療はされているのですか。

Fさん 平均で500mlの缶を毎日12~13缶くらい飲んでいました。支援センターがかかわり始めた平成10年の時点で、すでにそういう状態だったようです。治療については、長男夫婦が病院に連れて行ったことはあるのですが、年齢的に難しいということで断られたそうです。

奥川 本当にアルコール依存症なのですか？

Fさん なければないで飲まないでもいられます。入院中は一滴も飲んでいませんでした。

奥川 じゃあ、依存症ではありませんね。でも、鉄工所をやっていた方ですから、若い頃から飲んでいたんでしょうね。

Fさん そのようです。



奥川 問題は、アルコールで失敗するようになったのはいつからなのか、ということなのですが、その点はわかりますか。

Fさん ちょっと、そこまででは……。

奥川 例えば、先ほどの次男の奥さんが脳梗塞で倒れたのがいつなのかをつかんでいれば、ああ、この時点でこの人はアルコールで失敗するようになっていたんだな、とわかりますよね。

Fさん なるほど……。

奥川 大事な事件や出来事をつかんだときには特にそうですが、情報と情報をつないで状況を浮き彫りにすることが大切です。次男の奥さんが倒れたときにはアルコールで失敗するようになっていた、ととらえられれば、このあたりが始まりなのか、もっと以前にもあったのか、と考えることができますよね。

Fさん はい。アルコールの件では、今住んでいる家の新築披露のときに、長男の奥さんの親戚がお祝いいらしたそうなのですが、やはり酔っぱらって暴言を吐いたりしたそうで、奥さんはとても不快な思いをされたようです。

発言 ご本人の経済状況がわかれば教えてください。

Fさん お金の話はよくされます。この家は建坪60坪で6000万円したとか、あの庭の木は何十万円したとか、わしの葬式の時には500万円寺に渡さなきゃいかん、それは息子が用意してくれているとか、お金の話は頻繁に出てきます。

奥川 豪邸ですね。ご本人はいくら出したんですか。

Fさん 自分がいくら出したか、という話は全然出てきません。

奥川 この人は自分が出していたら言いそうな人ですか？

Fさん 絶対言うと思います（笑）。

奥川 じゃあ、出していないのかもしれませんが。息子さんの経営している運送会社は景気がいいんですか。

Fさん そのようです。

奥川 トラックは何台くらいあるんですか。

Fさん そこまでは、ちょっとわかりません。

奥川 そういう情報があるだけで、だいたいの会社の規模がわかるんですけどね。

Fさん なるほど……。 「立派な息子さんを育てましたね」とは言ったのですが。

奥川 そうしたら、何と行ってました？

Fさん すごく嬉しそうな顔をしていました。自慢の息子のように、息子さんの悪口は絶対言いません。

奥川 なるほど。

Fさん 「わしは息子の家の守をしているんだ」

とおっしゃっています。

奥川 「息子の家」と言っているんですね、自分の家ではなく。

ほかにはいかがですか。

発言 酒代は誰が出しているんですか？

Fさん ご本人です。いつもお財布の中に4～5万円入っていて、残りが少なくなるとお嫁さんに言って、銀行からおろしてきてもらうそうです。

発言 長男夫婦は、なぜご本人の飲酒をとめないのですか。

Fさん その点をお聞きすると、「家にお酒がないと、自分で電動バイクに乗って買いに行きます。事故を起こしやしないかと、とても心配なんです。お酒があればバイクに乗って外に出ることもないので、切らさないようにお酒を用意しています」とおっしゃっていました。

私としては、食事を届けたり、金銭管理をしてあげたり、豪邸にも住まわせてあげたりというように、息子さんたちなりにご本人のことを大切にしていると感じています。

発言 ご本人には、蓄えは十分あるのでしょうか。

Fさん この間聞いた話ですが、最近お嫁さんに「わしの金、なんぼ残ってる？」と聞いたら「うん、だいぶ減ってるよ」と言われたそうです（笑）。

発言 蓄えが減っていることを、本人は心配していないんですか。

Fさん そう聞くと、「息子はわしが困るような

ことはせん」とおっしゃいます。

奥川 息子さんへの期待にジャンプしてしまったんですね。お年寄りにとっては、自分の貯金
がなくなっていくのは寂しいものなんです。
自己像が^{セルフイメージ}どんどん下がってしまうんです。

この人は「息子の家の守」をしている。つまり、自分の家は失ってしまったわけです。そして今、貯金も失おうとしている。その前には何を失っていますか。

Fさん 奥さん——。

奥川 そうですね。妻を亡くした。きっと他にも失ってきたものはあるんじゃないですか。

Fさん 数年前に、危ないからということで免許証を長男さんに取り上げられて、車も廃車にされたそうです。不景気で閉めた鉄工所には、



工場ができるだけの設備はあるのですが、息子さんが電源を切っていて使えない状態になっています。

奥川 ご本人はそういう状況をどう感じていますか。

Fさん 「わしはまだ働けるんだ」とよくおっしゃっています。

奥川 なるほど。そういう状態を見て、Fさんはどう思いますか。

Fさん 本人が「まだできる」と思っている可能性を息子さんが切っている——。

問題の中核は何か

奥川 では、このあたりでこのケースの〈問題の中核〉を考えてみましょう。いろいろな問題状況の中核には何があるのか。どんなことが根本原因となって、さまざまな現象が生じているのか。グループで10分ほどディスカッションしてください。

・10分間、グループで話し合う。

奥川 そちらのグループでは、どんな話が出ましたか。

グループ1 はい。この方はこれまでに奥さんを亡くし、家をなくし、車をなくしといったさまざまな喪失体験のなかで非常に孤独感を感じていると思います。そして、アルコールに頼り、そのことによって、本人の生きる力も失われていると思います。そうした状況を打開するためには、なんらかの役割をご本人と一緒に探ることが大事なのではないかと思いました。

奥川 そうすると、このケースの中核、さまざまな出来事を生じさせている根本的なものは喪失体験ということですか。

グループ1 う～ん……。

奥II いいところまではいっているんですよ。そちらのグループはいかがでしたか。

グループ2 喪失体験というのは同じでした。もう一つは、このご家族はお父さんのアルコール依存でいろいろ迷惑を被っているにもかかわらず、食事をつくったり金銭管理をしたり、きちんとかかわろうとしている優しい家族だと思いました。でも、その優しさが裏目裏目に出てしまっているようなので、長男夫婦に認識をちょっと改めていただくといいのではないかと思います。

奥II どんなふうに改めてもらうといいと思いますか。

グループ2 今の思いやりを……。ちょっと、うまく表現できません。

奥II 問題の中核を考えるとというのは、どう対応するかという手立てを考えることではなく、クライアントをより深く理解するための急所を考えるということなんです。「どう対応すればいいか」を考えるためには、まず「なぜ今のような状況になっているのか」を解明し、きちんと理解しなければ、本当に相手に届く援助はできませんよね。このお父さんと家族は、なぜこういう状況に陥っているのか――。

発言 やはり、アルコールが根っこにあるような気がするのですが。

奥II では、なぜアルコールを飲んで問題を起こしてしまうのでしょうかね。

発言 なるほど……。たしかに、アルコールを

飲み続ける原因があるはずですね。

セルフイメージ 自己像と周囲の評価のギャップ

奥II 先ほど、Fさんはこのお父さんが自分のことをどう感じているとおっしゃっていました。

Fさん ご本人は、まだ自分は働けると思っています。

奥II でも、周りから見ると？

Fさん 援助を必要とする人――。

奥II そうですね。危ないからと免許を取り上げ、食事をつくって届け、豪邸に住まわせる。これらはすべて家族の愛情から出ている行為ですが、あくまでもご本人を「保護すべき存在」として見ていますよね。そのことには、当然ご本人も気づいているはずですよ。

つまり、本人の「まだ自分は働ける」というセルフイメージ「自己像」と「保護すべき存在」という周囲からの評価にギャップがあるわけです。もしかすると、そのギャップを忘れるために、せっせとアルコールを飲んでいるのかもしれない。実は、このギャップをもたらすものが「老い」なんです。

この人は67歳の時に鉄工所を閉めた。引き際を自分で決められるというのは、すごい能力です。でも、車の運転については引き際を見極められず、見かねて息子が免許証を取り上げた。この時点では、すでに自分を客観的に見る能力が落ちていたわけです。これが「老い」です。

ですから、このケースの問題の中核には、

「喪失体験+老い」があって、ここからさまざまな問題状況が生じているわけです。

Fさん そうやって読み解いていくんですね。とてもそんなふうには考えられませんでした。

どうアプローチしていくか

奥川 まだ終わっていませんよ (笑)。ここからが今日の本題です。では、こうしたことを踏まえた上で、現在の状況を突破するためには、このクライアントにどうアプローチしていけばいいと思いますか。

Fさん セルフイメージ ご本人の自己像と周囲の認識にギャップがあるという点を長男夫婦に理解してもらうことが大切なのではないかと思いました。

奥川 そうですね。長男夫婦が、どうして今のようになっているのかというからくりを理解できれば、ご本人に対する見方や対応も変わってくるはずですからね。それと、ご本人に現在の状況をきちんと認識してもらうことも大切ですよ。

Fさん これが「老い」なんですよ、というふうにですか。

奥川 いや、それは言っちゃダメ (笑)。「歳をとるって辛いですよ」と言えはいいんじゃないですか。

Fさん はい、わかりました。

奥川 「根こぎ現象」といいますが、この人はずっと対象喪失をし続けています。67歳で鉄工所を閉めた。これも対象喪失です。4年前には奥さんを亡くした。死別のストレスというのはも



のすごく高い。これも大きな対象喪失です。そして、車も失い、自分が建てた家もなくなりました。喪失体験の連続ですよ。自分の拠り所をどんどん失っています。仕事面では、当時はまだ力もありましたから、鉄工所の代わりに農業という対象を見つけられた。でも、奥さんを亡くしてからは、代替になるものを何か見つけられているのか。その点も援助の一つのカギなんじゃないでしょうか。何か代替となるものはありそうですか。

Fさん そうですね。ご本人は電動バイクに乗って外に出かけるのを楽しみにしているのですが、先ほども申し上げたように、息子さんは危ないと思っていますので、もしかするとポチポチ取り上げられるかもしれません。

奥川 Fさんの目から見て、この方が電動バイクに乗るのは危ないですか。

Fさん いえ、大丈夫だと思います。少なくとも、家の中でお酒をずっと飲んでいるよりはいいと思います。

発言 高齢者の場合、信号がよく見えなくて事故になるケースがあるという話を聞いたことがあります。

Fさん この方が通常移動する範囲には、信号は一つもありません。道もとても広いです。

奥川 じゃあ、いいじゃないですか。

Fさん ただ、ご本人のことを大事に思っている息子さんの気持ちを考えると、私の口からは言いにくいです。

奥川 Fさんが言うのではなくて、ご本人が息子さんに対して自分で主張できるように支援することが大切なんです。この人は「息子は自分の悪いようにはしない」と言って、現在の状況と折り合いをつけようとしています。全面的には折り合えないからいろいろグチを言ったり、時々爆発したりしてるわけですね。ですから、自分で直接息子に対して主張できるように力をつけていくことで、現在の状況を打開する突破口になるかもしれませんよ。

Fさん わかりました。

奥川 今後の援助についての見通しは立ちましたか。

Fさん はい。まずはご本人ときちんと向き合って、「歳をとるって辛いですね」というように、本人に寄り添いながら話を^{セラフィメーション}して、自己像と現実にギャップがあるという現状について理解していただきたいと思います。その上で、電動バイクについてご本人の口から息子さん^{セラフィメーション}にお願いするよう話をしていきます。

そして、息子さんたちにも、問題の中核につ

いてお話しし、なぜ今のような状況になってしまっているのかを理解していただきたいと思います。

奥川 息子さんたちとお話しする時は、ちゃんとお二人の努力をいたわることも忘れてはいけませんよ。実際、お父さんのためによかれと思って、息子さんたちなりに一生懸命やっているわけですから。

Fさん はい。わかりました。

奥川 では、最後に感想をどうぞ。

Fさん 検討会が始まる前は、いったいどこから手をつけていいのか見当もつかない状態でした。でも、皆さんに検討していただいたおかげで、なぜ今のような状況になってしまったのか^{セラフィメーション}が解けたので、これからご本人や息子さん夫婦にきちんとかかわっていけるような気がします。今日は本当にありがとうございました。

奥川 よかったですね、Fさん。頑張ってくださいね。

相談援助職者として実力をつけていくためには、考えなければだめです。今日は私と一緒に考える作業をしましたが、皆さんがご自身で「考える習慣」を身につけていただきたと思います。私たちが行っている相談援助という仕事は、目に見えないものです。考えるためには、目に見える形にすることが有効です。気になる事例を書くというのも、一つの方法として非常に有効です。ぜひ、考える作業を繰り返して、自分のなかで習慣化して、力をつけていただきたいと思います。